大谷さんと過ごした名古屋での 10 年

松本淳
matumotoatsu@hi.enjoy.ne.jp
平成 28 年 2 月 10 日

1. 出会い

1975 年頃名古屋のプラズマ研で岩井鶴二先生から大谷俊介さんを紹介されたのが初めての出会いだった。そのとき大谷さんは言葉少なくはにかむような態度が印象に残ったが、私の第一印象は見当違いであることはすぐに分かった。しかしそれから 10 年の間名古屋で大谷さんと親しく付き合うことになろうとは、そのときは夢にも思わなかった。そのころ阪大の落ちこぼれ大学院生であった私に岩井先生は最後のチャンスを与えてくださった･･･当時 P 研には所定の目的を終えた（したがってマシンタイムは比較的自由に取れる）ECR プラズマ装置（TPM と呼ばれていた）があり、そのプラズマから引き出される多価イオンの価数分布などを実験的に調べるという共同研究が発足し、そのメンバーに私も参加させてもらうことになったのだ。大阪と名古屋を往き来する生活が始まった。

2. 名古屋での 10 年

名古屋に滞在中は P 研の宿舎に泊まっていたが、夕食は時折相原秀行さん（TPM の責任者）と名大近くの伊勝庵という食堂でとるほかは、たいてい一人で本山や東山公園駅付近で食事していた。そのような私を大谷さんは憐れに思われたのか、最初の出会いから 3～4 ヶ月経ってから本山駅近くの居酒屋に初めて誘っていただいた。以後大谷さんと二人（または 3～4 人で）居酒屋で飲んで歓談するという関係が 10 年続くことになる。

実は大谷さんと飲む機会はそれ以前にも何度かあった。共同研究者がほぼ全員 1～2 泊の日程で P 研に集まり実験や作業を行うことは月に 1～2 度あり、そのときは（特に良いデータが取れた時など）夜は宴会になるのが普通で大谷さんは立派に幹事役を果たされていた。それは共同研究者の間では周知のことで、私もそのような宴会に参加させていただき十分楽しんでいたが、そのような宴会とは別に大谷さんと少人数で本山駅周辺の居酒屋での歓談は、それはそれは楽しいものであった。その日の実験結果などの検討や打ち合わせから始まり物理学から科学一般、学問や文学、芸術の話題に及ぶことが多かった。大谷さんも私も通俗的な話題も大好きでグルメや人々のうわさ話に広がってゆくこともしばしばだった。うわさ話では二人の共通の知人が話題になるのが必然で、共同研究者や P 研の所員、原子衝突グループの人たちと次々と広がってゆき楽しいおしゃべりでお酒も進んだ。そのような居酒屋の歓談が名古屋滞在中一週間に 1～2 度の頻度で 10 年続いたのだった。 この 10 年間で大谷さんと居酒屋で飲んだ回数は、共同研究者の中で私がずば抜けて多いのではないかとひそかに思っている。

P 研の大谷さんの研究室へは内外からの研究者の訪問も多く、夜の食事などはときどき私も誘っていただき、おかげで狭い私の世界も少しは広がっていった。

Oak Ridge の Crandall 氏が P 研を訪問し数日滞在されたことがあった。大谷さんは一日彼を知多半島のドライブに連れ出し、私もお伴した。大谷さんが車を運転し、C 氏が助手席に私は後ろの席に着いた。このとき大谷さんが私に頼んだことは、英語の語彙が思いつかなくて会話が途切れた時、すぐさま辞書を引いて 2 人にその言葉を伝えることだった。当時はまだ電子辞書はなく紙の辞書を車の中で一心にめくり、《渡り蟹 swimming crab, 鯰 catfish, 陶磁器 pottery》などの言葉を引いたことを今でもよく覚えている。昼

食は知多半島の先端師崎港の小さな食堂で渡り蟹を 3 人でもうそれ以上腹に入らないというぐらいたらふく食べた。当時は 3 人とも若かったのだ。

居酒屋だけでなく大谷さんの家にもよく招待された。P 研での実験や作業が一段落したときなど、名古屋在住の花城宏明さんや日野利彦さんたちと一緒によく招待されごちそうになった。大谷さんの奥さんや 2 人の子供さんとも顔なじみになった。10 年のうち後半の 4 年間は大阪から名古屋に引っ越ししていたが、家族で大谷さんの家に招待されたこともあった。

3. 名古屋以後

名古屋の 10 年の後、私は広島工大に職を得て広島に転出した。以後 P 研には共同研究者として通うことになるが、広島での忙しさにかまけて次第に名古屋は遠くなっていった。大谷さんもそのうち電通大に転出されて、以前のように居酒屋で飲むということもほとんどなくなってしまった。もちろん学会やパーティなど大勢で大谷さんと飲むことは少なからずあったけど。

Tokyo-EBIT の建設とそれに続く華々しい多くの成果をあげられ、広島から眺める大谷さんはまぶしいばかりの存在だった。ちょうど遠くから眺める明るい灯台のように私には見えた。

広島では、ゼミや卒研の学生の指導、学内の委員会の運営などで戸惑うことが多かったが、「大谷さんならどうするだろうか？」ということがしばしば頭に浮かび、彼ならこうするだろうということを行動の基準にすることが多かった。今から思うと大谷さんほど力も才能もない者が大谷さんのまねをして、端から見るとさぞ滑稽なことであったろうと自分を恥じるばかりだが、最近ではあながち間違ってはいなかったろうと自分を慰めている。

4. おわりに

大谷さんと最後にお会いしたのは 2011 年の秋、関西（枚方と奈良）で楽しくまた思い出深いものになったが、その 3 ヶ月前の新潟での出会いも忘れがたいものだった。

2011 年 8 月檀上篤徳さんの追悼シンポジウムが新潟大で催されることになり、私はそのシンポに参加するため前日に新潟入りし、当日はシンポが午後遅くから始まるので午前中は新潟見物をしようと市内をぶらついていた。そうしたら繁華街で何と大谷さんに偶然出会ったのだ。二人はすぐにお互いの状況を察して、出会いを喜び合い半日行動を共にした。落ちついたレストランで昼食を取り二人で一本のビール（！）をゆっくり味わって飲んだ。それから喫茶店でコーヒーをすすりながら、また市内を散策しながらお互いの名古屋以来の来し方などを語り合ったのだ。20 数年ぶりのゆったりとした時間だった。大谷さんは昔と変わらなかった。

大谷さん、あなたにお会いできて本当によかった。たくさんの楽しい思い出をどうもありがとうございました。